

「教育臨床総合研究15 2016研究」

平成27年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on the “Basic Experience Area” in 2015

寺井由美*

Yumi TERAJ

光森智哉*

Tomoya MITSUMORI

長岡美沙**

Misa NAGAOKA

山田二郎**

Jiro YAMADA

柳野幸敬**

Yukinori YANAGINO

川路澄人***

Sumito KAWAJI

要旨

鳥根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」を実施してから12年が経過し、1000時間体験学修を修了した9期目の卒業生を送り出すことができた。

ここでは、平成27年度の「1000時間体験学修」における基礎体験領域の取り組みの概要、さらには基礎体験におけるアンケートから見た成果等について報告する。

〔キーワード〕 基礎体験領域、基礎体験におけるアンケート、成果と課題

I はじめに

「1000時間体験学修」は、1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であり、「基礎体験」「学校教育体験」「臨床・カウンセリング体験」の3つの体験領域から構成されている。

基礎体験領域は、地域の様々な活動への参加や社会教育施設などでの教育活動、小・中学校等での学習支援等を通じて、教師に必要な資質の土台となる社会性や豊かな人間性を養うものである。さらに、子ども、地域、学校と主体的に関わり、多様な体験をもとにした教育実践力を育むものである。基本的な流れは、各事業所が行う様々なプログラムの中から、興味・関心のある体験活動に参加し、活動を通して自分の課題に「気づく」、その課題の解決に向けた活動の方向性を「つかむ」、活動への取り組みを「深める」という段階を経て進めていくものである。また、活動にあたっては附属教育支援センター専任教員が、事前・事中・事後指導にあたり、学生の学びがより充実したものになるように支援を行い、学生は体験で得た学びを4年間で積み上げていく。

*元鳥根大学教育学部附属教育支援センター

**鳥根大学教育学部附属教育支援センター

***鳥根大学教育学部初等教育開発講座（元附属教育支援センター兼任）

また、活動を通して身につけさせたい資質・能力として10の力（学校理解，子ども理解，教科の基礎知識・技能，学習支援の指導技術，リーダーシップ・協力，社会参加，コミュニケーション，探求力，社会の一員としての自覚，リテラシー）を設定しており，評価の具体的観点としている。

各活動の事後指導や各基礎体験セミナーの振り返りの際には，これらの観点をもとに活動記録票の振り返りシートに自己評価をさせ，自己認識や課題意識の深化などの自己成長を促している。

Ⅱ 基礎体験領域における取り組みの経緯

1000時間体験学修がスタートした平成16年度から平成27年度までの，12年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点を表1にまとめた。平成27年度の改善として実習セメスター学校教育体験，各学年の基礎セミナーの2点を挙げている。

実習セメスター学校教育体験では，これまで協定締結市町村の全小中学校に募集用紙を配布し学生の受け入れを募ってきたが，募集に対し参加学生がゼロという活動も多くあった。一昨年度の母校体験の見直しにより活動に対する学生参加率がアップしてきたが，本年度はさらに活動先への交通の利便性や過去の実績等を考慮し，募集地域を松江市，米子市，境港市，隠岐郡の4地域に限定して募集することとした。またその他の協定締結市町村内の学校については，学生の希望によるオプションとして実施することにした。

基礎セミナーの一つである1・2年対象基礎体験交流会では，これまで10クラスの会場に分かれグループ別の情報交換会を行ってきたが，学生ホールで一堂に会してのワークショップ方式に変更した。

表1 12年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点

○：実施，－：未実施，△：試行，◎：改善

	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
事業所との連絡協議会	－	－	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター学校教育体験	－	－	○	○	○	○	○	◎	○	◎	◎	◎
ビビットひろば	－	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○
事前・事後指導の実施	－	－	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○
各学年の基礎セミナー実施	－	－	○	○	◎	○	◎	◎	○	◎	◎	◎
だんだん塾講演会	－	－	○	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○
基礎体験活動記録票	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
入門期セミナーⅠ	△	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○
基礎体験合同説明会	－	－	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター説明会	－	－	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○
学内資格認定（3資格）	－	－	－	－	○	○	○	○	○	○	○	○
卒業生及び就職先への聞き取り調査等					△	－	－	－	◎	◎	－	－
専任教員数	2名	4名※1	4名	4名	5名※2	4名	4名	5名	4名	4名	5名※2	4名※2

(注) ※1 H17以降1名は鳥取県から， ※2 H20,26,27年度 1名は特任教員

Ⅲ 平成27年度の取り組み

《末尾に資料として「平成27年度基礎体験領域における年間活動実施一覧表」を掲載》

1. 基礎体験活動

(1) 基礎体験活動の参加実績（実習 Semester における活動ならびに専攻別体験活動を除く）

基礎体験活動を卒業要件とする対象学年が4学年全てになった平成19年度からの実績はおおよそのべ2000人前後で推移している（表2参照）。今年度は、島根県・鳥取県内において181団体より392件の活動募集を出していただいた。その内、実際に学生が参加した活動は323件であり延べ2223人の学生が体験活動を行った。活動受入団体数、募集活動数は今年減少傾向にある一方で、参加学生延べ人数は2200人以上であり一定の水準を保っている。学生が参加可能となる基礎体験活動の条件（場所、時間、内容等）がある程度明確になる中で持続可能な活動が精選されつつある。また、一活動で多くの人数を募集するものが増えている傾向があることも要因として考えられる。

今年度の卒業生の平均体験時間は539.8時間であり、昨年度593.6時間と比較するとやや減少している。その要因としては、基礎体験（選択）を1000時間以上行っている学生が約17%（H26年度は5%）いたものの、400～500時間の学生が増加した分、全体として2極化し、平均としてはやや下方にずれたものと思われる。

いずれにしても、卒業要件とされる基礎体験（選択）400時間に対し、例年同様に平均して約150時間も多く取り組んでおり、各期必修セミナー後のアンケート調査の結果も含めて、体験学修の意義が学生にしっかり理解されていることが分かる。

表2 基礎体験活動への参加実績

	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
受入団体数（団体）	225	226	266	295	277	266	244	206	181
募集活動数（件）	396	451	475	504	511	508	496	443	392
学生参加活動数（件）	341	338	340	375	400	348	370	253	323
参加学生延べ数（人）	2012	1898	1953	2397	2478	2292	2469	2396	2223

次に、今年度の体験活動の種別を参加人数による割合で示す（図1）と、青少年教育施設を中心とする社会教育施設での活動への参加が多い。続いて各種団体における活動、そして大学主催の活動（環境寺子屋、公開講座や競技会の支援など）が占めている。土・日曜日もしくは夕方などの放課後に行われる活動でバス等の輸送手段が確保でき、そして大人数で募集される施設・団体の活動は、学生にとって参加しやすく、割合的に参加者は多くなるであろう。また、学生個人における活動種別の割合を調べると、幅広く多様な活

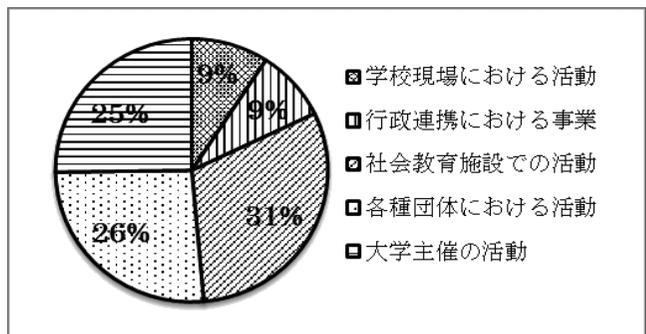


図1 基礎体験活動の参加種別（平成27年度）

動をしている学生がいる一方で同じ種類もしくは同じ事業主での活動のみに偏っている学生がかなりいることが以前より指摘されている。今年度も2年次生必修の充実期セミナーで、活動名と時間に加えて各自の活動種別の割合を示した円グラフを時間認定確認資料として配付したことで、自分自身で活動種別のバランスを視覚的に確認でき、意識化を図れたと考える。今後も、教師力を総合的に育成する観点から、活動種別の偏りを是正していく改善策を検討していく必要がある。

学校現場での活動は、教育学部として少なく思われるが、学校教育実習が行われる3年次生に、実習セメスターにおける学校教育体験活動として別途行われているので、そちらを参照してほしい。

(2) だんだん塾（事前・事中・事後指導）

基礎体験活動を行う際には、必ず30分間ずつの事前・事後指導を行っている。活動が長期にわたる場合は事中共指導を行う場合もある。事前指導においては、活動内容の概要を知らせるとともに参加理由を確認し、活動を通して何を学び、どんな力をつけたいかなどの目的を考えさせ、活動記録票の記入を通して明確にさせている。活動後の事後指導では、活動の振り返りを通して自分の成長や課題を確認したり、他の参加者と学びの共有化を図ったりすることにより、体験学修の有意義感を持たせるように努めている。また、学生から出された課題に対しては専任教員がアドバイスを送り、必要に応じて事業主と連携を取りながら今後の活動に向けての支援を行っている。これらの指導は4名の専任教員が地域割により分担して行っている。

(3) 専任教員による日常相談活動

学生からの要望で、不定期ではあるが基礎体験活動や広く生活面における個別相談、教員採用試験に向けての願書添削や面接指導、小論文指導等を行っている。基礎体験活動の事前・事後指導や学校教育体験領域における学校教育実習、学校教育実践研究などで顔見知りの学生も多く、あらゆる相談の窓口となっている。また、現役で教員採用試験合格を目指す学生を支援する「未来教師塾」が2月に開設され、専任・特任教員もその指導者として協力している。

(4) 基礎体験セミナー

基礎体験活動の取組をふり返るとともに、活動の目的や積極的参加への心構えを再確認するために、各学年の段階に応じた各種セミナーを随時実施している。

学年	学年別各種セミナー
1年	4/11(土)～4/12(日) 入門期セミナー I 9/25(金) スタートアップセミナー 2/16(火) 基礎体験交流会(1・2年)
2年	9/28(月) 充実期セミナー 2/16(火) 基礎体験交流会(1・2年)
3年	6/19(金) 実習セメスター説明会 8/21(金) 実習セメスター合同事前指導 12/4(金) 応用期セミナー
4年	9/24(木) 発展期セミナー

(5) 島大ビビットひろば

松江市内の小学生の土曜日における居場所づくりとして、教育支援センター主催で開催してきた基礎体験の事業で、今年で12年目を迎える。昨年に引き続き今年度も学生の企画段階の負担等を考慮して、前後期各2回の開催を各1回とした(表3)。学生たちはどのような活動をしたら子どもたちに喜んでもらえるのか、そのために必要な準備は何かなど、自分たちで話し合い、企画を行った。また、当日は子どもとふれ合うのが初めてという1年生もおり、子ども理解や企画力育成の一步になっている。また、これを機会に他の基礎体験活動に積極的に挑戦する学生も見られる。また、各専攻からも専攻別体験として児童向けの講座を毎回企画・開催してもらい、それぞれの学びを活かした活動提供に努めてもらっている。

表3 ビビットひろばの開催実績

回数	実施日時・実施講座名・申込者数
第1回	7月12日(土) 9:30～12:00 講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ】73名
第2回	11月15日(土) 9:30～12:00 講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ】58名

(6) 入門期セミナー I

新入生を対象とした初年次教育のガイダンスである。今年度は下記の通り実施した。

- 1) ねらい
 - ①教育体験活動「1000時間体験学修」の全体像を把握し、大学生活4年間の教育体験活動に対する見通しを持つ。
 - ②これからの大学生活を共にする学生同士が交流を深め、円滑な人間関係を築くきっかけにすると共に、島根大学教育学部生としての自覚を高める。
- 2) 期 日 平成27年4月11日(土)～4月12日(日)
- 3) 会 場 島根県立青少年の家
- 4) 参加者 島根大学教育学部1年生170名、学生スタッフ38名、教職員9名
- 5) 内 容

研修1…「1000時間体験学修の意義」	研修2…「基礎体験活動の進め方」
研修3…「出会いの場の演出と仲間づくり」	研修4…「大学生の一般常識とマナー」
研修5…「基礎体験活動や大学生活についてディスカッション」	
研修6…「2日間の振り返り」	

新入生によるセミナーに対する自己評価の結果は次の通りであった。肯定的回答5、否定的回答1とした5段階による数値の1年生全体の平均値を示す

- | |
|--------------------------------------|
| ① 入門期セミナー I は、有意義な活動となったか。【4.8】 |
| ② 同級生との交流を通して新たな人間関係を結ぶことができたか。【4.7】 |
| ③ 1000時間体験学修の全体像を理解することができたか。【4.3】 |
| ④ 教育学部生としての意欲や自覚を持つことができたか。【4.5】 |
| ⑤ 入門期セミナーに向けて立てた個人目標は達成できたか。【4.2】 |

各観点とも平均値は全て4ポイント以上で肯定的な数値であった。特に本セミナーの有意義感と同級生との交流に関わる数値が高くなっている。しかし、その2点と比べると観点③の1000時間体験学修の全体像の理解については、やや低い数値である。研修1の教員による講義と研修2の学生企画研修との繋がりやねらいについて検討し、効果的な進め方を考えていく必要がある。

また、本セミナーの特徴は、ピア・サポート制度を活用し、先輩である上級生によって研修内容の大半が企画・運営されている点にある。今年度は、38名の上級生が学生スタッフとして参加した。研修2～5を学生企画として担当し、新入生の目線に立ったセミナーを実施した。新入生の感想を見ると、入学当初の不安が解消され、これから始まる大学生活への意欲や希望が高まったという感想と共に、生き生きと活動する学生スタッフの姿に刺激を受け、自分もこんな先輩になりたいと憧れの気持ちを持ったという感想が多くあった。また、学生スタッフの振り返りには、リーダーシップや協調性、企画力や運営力などの総合的な自己能力の成長を感じるとともに、今後の課題について言及している内容が多くあった。



研修5 ディスカッション

学生参画による入門期セミナーⅠは、新入生、上級生、両者にとって学びの多い貴重な体験の場となっており、今後も充実した活動にしていきたいと考える。

(7) 実習セメスター学校教育体験活動

3年生後期の教育実習（実習Ⅳ・Ⅴ）期間の9月から12月を実習セメスターとし、その期間に附属学校園での教育実習の学びと、公立学校での体験を互いに往還させながら教育実践力を高めることをねらいとして、平成18年より学校教育体験活動の推進に取り組んでいる。

6月下旬に開催した説明会では、公立学校での校長経験のある教育支援センターの教員、昨年度の体験者である4年生、平成25年度本学部卒業の現職教員の3名に、実習セメスター学校教育体験活動で得られる学びについて、それぞれの立場から話してもらい参加意欲の向上を図った。

実習セメスター学校教育体験活動先の募集については、第Ⅱ章に記述している通り松江市、米子市、境港市、隠岐郡の4地域の教育委員会を通じて学生の受入れ募集を行った。その他の協定締結市町村内の学校については、学生の希望により受け入れを依頼するオプションとして

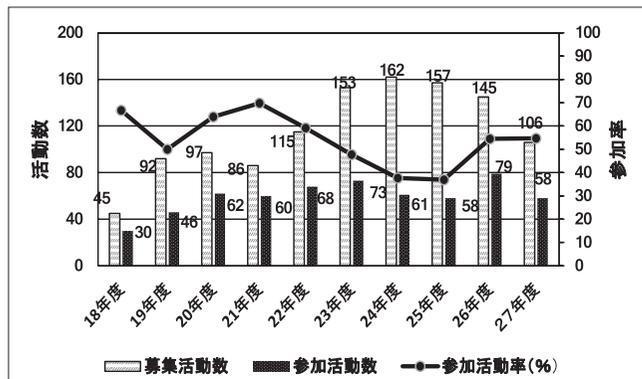


図2 実習セメスター学校教育体験活動の募集活動数等の推移

対応することとした。

今年度は59の学校園より106の活動について募集があった。昨年度の募集学校園数85、活動数145から大きく減少した。募集地域を縮小した結果として当然の数値となった。しかし学生の参加活動数も79から58と減少し、参加活動率は54.7%で昨年度とほぼ横ばい状態であった。

学校からのニーズにできる限り応えていくことを期待しての取り組みであったが効果は得られなかった。

また、参加人数等の推移を図3に表した。今年度は参加学生数114名、参加率65%であった。昨年の参加率71%から減少しており、セメスター体験について消極的な姿勢が見られた。このことは、募集地域を縮小しても、参加活動率を上げることができなかったことの要因の一つとして考えられる。また、学生の参加状況を見ると、一校に30名近くの学生が集中するなど、偏りがあった点も挙げられる。今後の実習セメスター学校体験活動への学生の参加方法を考える上の課題となるであろう。

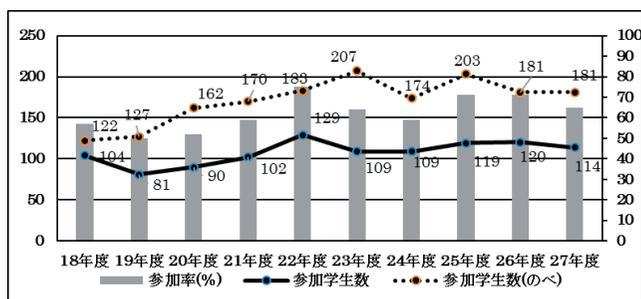


図3 実習セメスター学校教育体験活動の参加人数等の推移

次に教師力10の指標のうち、学校教育体験に直接関わる指標について、実習セメスター学校教育体験活動に参加した学生と、参加しなかった学生について比較したデータが表4である。

すべての指標においては実習セメスター参加者、不参加者ともに、2年生2月の時点より数値が伸びている。これは、教育実習での学びが大きいと考えられる。中でも特に実習セメスター参加者は、学校理解について12月の時点で不参加者より0,4ポイント上回っている。セメスター体験の事後指導時になるとさらにアップして4ポイント以上となっている。実習では、授業実践をすることで精一杯だった学生が、セメスター体験では、ゆとりをもって学校全体や担任の仕事の様子等を観察することができ、理解を深めることに繋がったと考えられる。また子ども理解や学習支援のための指導技術でセメスター体験の事後指導時でのポイントが下がっているのは、子どもと関われば関わるほど、子ども理解の難しさ個別の支援の難しさを経験し、自分の力量不足を感じるとともに課題を見つけた結果であると推測される。

表4 実習セメスター参加学生の学びについて

1.学校理解

設問	2年生・2月	3年生・12月			セメスター後(11～3月)
		全体	実習セメスター不参加者	実習セメスター参加者	実習セメスター参加者
①学校や校種の特徴等を理解することができた。	3,0	3,7	3,4	<u>3,8</u>	<u>4,2</u>
②教師の仕事などを理解することができた。	3,0	3,6	3,4	<u>3,8</u>	<u>4,1</u>

2.子ども理解

①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができた。	3,7	3,9	3,9	3,9	3,8
②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応が適切にできた。	3,4	3,6	3,6	3,6	3,6

3.教科基礎知識・技能

①学習支援する教科等に関する基礎的基本的な知識や技能が身についた。	2,9	3,4	3,3	3,5	3,5
-----------------------------------	-----	-----	-----	-----	-----

4.学習支援の指導技術

①学習支援のための指導技術が身についた。	2,7	3,5	3,5	3,6	<u>3,3</u>
----------------------	-----	-----	-----	-----	------------

受入れ校（アンケート協力50校園）からの評価の結果は次の通りであった。肯定的回答5，否定的回答1とした5段階による数値の平均値を示す。

- ① 学生の活動は、貴校の期待通りであったか。【4.3】
- ② 参加学生の様子について
- ・参加意欲、態度【4.7】
 - ・子どもへの接し方【4.5】
 - ・学習支援の姿勢【4.3】
 - ・挨拶等マナー【4.4】
 - ・服装等生活面【4.5】
- ③ 実習セメスターに関わる手続き、説明について
- ・実施前の説明の時期【3.8】
 - ・説明内容【3.7】
 - ・募集の手続き【3.8】

学生たちの活動は、ほとんどの受け入れ校の期待やニーズに応えることができた。

また観点別評価では、いずれの項目も高い数値である。学生自身が自主的に登録していることや教育実習を通しての指導など、大学での取り組みが成果を上げていると考えられる。

（8）だんだん塾講演会

回数	月 日	講演者	講演テーマ	参加人数
第1回	7月8日(水) 14:30-16:00	島根県教育庁教育指導課 山本 一穂 氏 しまねふるまい推進指導員 井上 恵美子 氏	ふるまいはみんなの宝 ～見てまねて感じて育つ しまねのふるまい～	69名
第2回	7月15日(水) 14:30-16:00	江津市立跡市小学校 玉木 敦 氏	自尊感情を高める教室 第I部 対個人編	37名
第3回	7月22日(水) 14:30-16:00	江津市立跡市小学校 玉木 敦 氏	自尊感情を高める教室 第II部 対相互作用編	38名
第4回	1月13日(水) 14:30-16:00	アドバンスレベルWRAPファシリテーター 益川 ねてる 氏	自分自身のためのWRAP ～心の取扱説明書～	62名
第5回	1月20日(水) 14:30-16:00	松江市立古志原小学校 高瀬 美砂子 氏	自己肯定感を育む	84名
第6回	1月27日(水) 14:30-16:00	島根大学教育学部附属教育支援センター 柳野 幸敬 氏	安全・安心で楽しい学校に するために	67名

今年度も基礎体験領域部門とC系G系領域部門の連携を図り「だんだん塾講演会兼C系G系特別講義」として共同で開催した。

毎回参加者も多く、講演内容は、学校教育現場に直接関わる内容や、自己の生き方・暮らし方に関わる内容等で学生にとって充実した実践的な内容になったと考える。

2. 学内資格認定制度

教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は延べ9名であった（表5）。

表5 学内資格認定者数

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	5名	4年生3名 3年生2名
学校教育サポーター	1名	4年生1名
コミュニティサービス・サポーター	3名	4年生2名 3年生1名

今年度の資格認定者は、オープンキャンパス、スタートアップセミナー（1年対象）充実期セミナー（2年生対象）の基礎体験交流会（1，2年対象）において自己の体験活動で得た学びを伝えたり，下級生の体験発表へのコメントやアドバイスを رفتたりした。下級生にとって先輩の生の声は説得力があり，自分自身の数年後の姿と重ね合わせながら熱心に聞いていた。

3. 各事業所との連携

基礎体験活動を推進していく上で，年間約400件という多数の活動を提供して下さる事業所との連携を密にしていくことは，体験の量的充実だけではなく質の向上においても大切である。今年度も，基礎体験活動合同説明会を1回，基礎体験活動連絡会議を2回実施し，本活動の趣旨や期待する学び，募集手続き等についての共通理解を行った。また，意見交換を通して学生によりよい学びの場や環境を作るとともに，受入事業所にとっても大学と連携することによるメリットのある活動のあり方や，学生募集の方法について話し合った。

(1) 基礎体験活動合同説明会及び第1回基礎体験活動連絡会議

《平成27年4月15日（水）》

合同説明会 (14:30～15:30)	場 所：第2体育館 参加者：1年生174名 事業所 25団体
連絡会議 (15:45～17:00)	場 所：教養講義室棟2号館2階503号室 参加者：40事業所より62名 支援センター 7名

入門期セミナーⅠを終え，基礎体験活動への意欲が高まっている1年生を対象に，実際の受入事業所を招いての基礎体験活動合同説明会を実施した。今年度は25事業所が参加して下さり，予定されている活動内容等について，1時間のポスターセッション方式で説明していただいた。学生たちも各ブースをまわって，実際に体験をさせていただいたり，活動内容の話を聞いたりして，今後どのような活動に取り組んでいこうかと真剣に考えているようであった。



基礎体験活動合同説明会

また，説明会終了後の連絡会議では，1000時間体験学修のねらいである，豊かな人間性と実践的な指導力育成に向けての取組方針や，基礎体験活動の流れ，事務手続，緊急時の連絡方法等について説明し，学生にとって有意義な体験活動にするために双方の共通理解を図った。

(2) 第2回基礎体験活動連絡会議

《平成28年2月23日（火）》

連絡会議 (14:30～16:30)	場 所：模擬授業演習室他 参加者：28事業所より34名 支援センター7名
-----------------------	---



連絡会議（分科会）

今年度の活動報告と学生の取組状況についての説明，及び来年度の方針をお伝えした。

その後の分科会は，主催団体別に3会場に分けて実施した。各事業所からは，学生は意欲的に取り組んでいると評価していただいた。また，学生の効果的な活用や学生の確保など，今後の取組に対する提案も多く出され，受け入れ先事業所同士の情報交換も図られた。

IV 基礎体験におけるアンケートからの成果

基礎体験における平成27年度の学生の学びはどのようなものであったか、その学修成果や取り組みの実態について、各学年のセミナーで行った学生の自己評価アンケート、ならびに受け入れ先事業所からのアンケートよりまとめた。

1. 基礎体験活動の評価について

基礎体験活動は、学部教育における教員としての学生の資質・能力の向上をめざし、地域の学校や社会教育施設との連携と協力により、学生により豊かな社会性や人間関係力を身につけさせ、教育的実践力を培うことをめざして実施しているものである。

基礎体験活動としてねらう力は、活動毎の振り返りに使用している基礎体験活動記録票や、プロフィールシートにも示されている、教師力10軸を基に作成したものである。そして、学年毎に実施している基礎体験セミナーでこの評価項目を基にして自己評価も行っている。

ここでは、1・2年生は基礎体験交流会、3年生は応用期セミナー、4年生は発展期セミナーで行った平成27年度の自己評価アンケートとともに、受け入れ先の事業所からのアンケートを基に、今年度の基礎体験の学びを振り返ってみたい。

2. 各セミナーで行った自己評価アンケート結果

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの教師力10軸に合わせた10項目（軸）と、その具体的目標である20項目の評価項目に設定している。

表6 基礎体験領域の自己評価項目一覧

1) 学校理解

- ①それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。
- ②教師の仕事（授業実践・学級経営・校務分掌）を理解することができたか。

2) 子ども理解（学習者理解）

- ①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。
- ②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。

3) 教科基礎知識・技能

- ①学習支援する教科等に関する基礎的・基本的な知識や技能をもつことができたか。

4) 学習支援のための指導技術（授業実践研究）

- ①学習支援のための基礎技術をもつことができたか。

5) リーダーシップ・協力

- ①状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすることができたか。
- ②活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか。
- ③グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか。

6) 社会参加

- ①自ら進んで地域社会と関わりをもち、主として学外での活動に積極的に取り組めたか。

7) コミュニケーション

- ①学校や地域の方々と積極的に関わりをもとうとすることができたか。
- ②場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。
- ③実際の活動場で子どもの話を聞き、それにきちんと答えることができたか。
- ④体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。

8) 探求力

- ①自分の長所や短所、これから伸ばしていきたい能力、克服すべき課題をきちんと把握できたか。
- ②仲間と協力して企画を立ち上げ、実施するところまで責任をもって行うことができたか。
- ③自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。

9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）

- ①社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。

10) リテラシー

- ①コンピューター等を活用して、体験に関わる必要な情報を収集したり、体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。
- ②参加した体験をふり返り、活動記録票をまとめたり、自己評価を整理したりできたか。

この10軸20項目の自己評価項目で、今年度の各セミナーの評価結果を表にまとめたものが、表7である。各評価項目とも、その結果を5段階評価の平均値で示している。

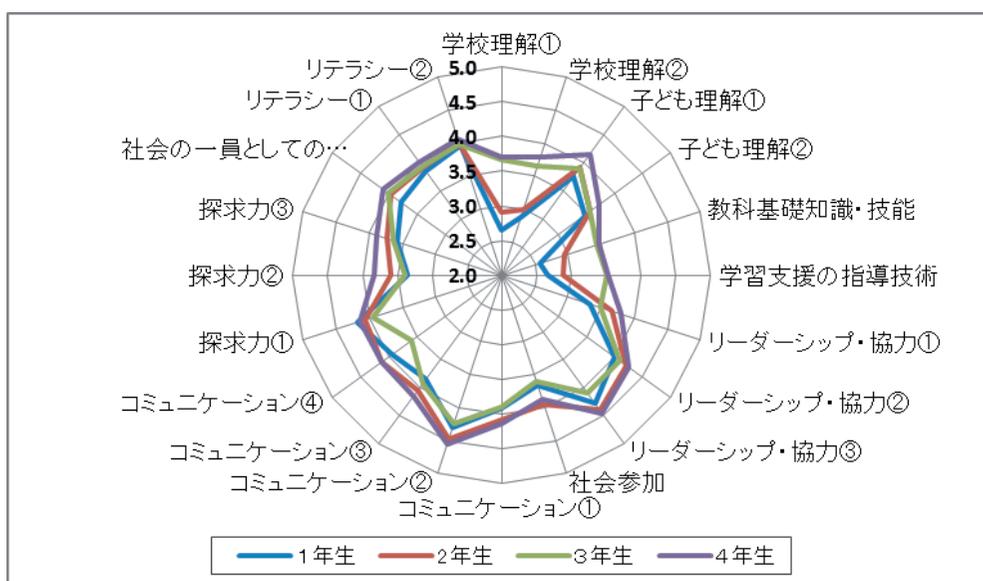
表7 学生の基礎体験の自己評価結果

自己評価項目	学年名・評価の実施時期 ・調査人数	5段階自己評価の数値の平均値			
		1年生 2016年2月 163人	2年生 2016年2月 167人	3年生 2016年12月 169人	4年生 2016年9月 168人
I 取り組み		3.4	3.3	3.3	3.2
II 有意義感		4.3	4.0	4.1	4.0
1 学校理解①		2.6	2.9	3.7	3.7
2 学校理解②		2.9	3.0	3.6	3.8
3 子ども理解①		3.8	3.9	3.9	4.1
4 子ども理解②		3.5	3.6	3.6	3.7
5 教科基礎知識・技能		2.6	2.9	3.4	3.5
6 学習支援の指導技術		2.7	2.9	3.5	3.5
7 リーダーシップ①		3.3	3.7	3.5	3.8
8 リーダーシップ②		4.0	4.2	4.1	4.3
9 リーダーシップ③		4.3	4.4	4.1	4.5
10 社会参加①		3.7	4.0	3.5	3.9
11 コミュニケーション①		3.9	4.1	3.9	4.1
12 コミュニケーション②		4.3	4.5	4.2	4.6

13	コミュニケーション③	3.9	4.1	3.9	4.2
14	コミュニケーション④	3.9	4.1	3.6	4.1
15	探求力①	4.2	4.1	3.9	4.1
16	探求力②	3.3	3.6	3.4	3.8
17	探求力③	3.6	3.7	3.6	3.9
18	社会の一員としての自覚	3.8	4.0	4.0	4.1
19	リテラシー①	3.9	3.9	3.9	4.0
20	リテラシー①	4.0	4.0	4.0	4.1

(表7中のIとIIは、基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である)

図4 学生の基礎体験の自己評価結果



さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、図4である。

本データは同一学年の4年間の変化を示したものではないが、図4のグラフからわかるように、学年が進むにつれて全体的に各項目の平均値が少しずつ上がっていくのがわかる。平均値の高いものとして、4年生の平均値を見てみると4.6のコミュニケーション②(場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか)、4.5のリーダーシップ③(グループの仲間、教員、地域の方々とは協力して活動することができたか)、4.3のリーダーシップ②(活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか)等があげられる。

逆に平均値の比較的低いものとしては、平均値3.5の「教科基礎知識・技能」、3.5の「学習支援のための指導技術」があげられる。これは、教科の基礎知識・技能や学習支援の指導は、教科の専門的な力量や指導経験が大きく影響するので、他の項目より自己評価が低くなったものと思われる。

また、学校理解①（教師の仕事を理解することができたか）のポイントが、1・2年生より3年生のほうが高いのは、3年生での教育実習や3年後期での実習セメスターでの学外学校体験を経験した影響が大きいと考えられる。

次に、表7の基礎体験学修の「取り組み」の様子と、「有意義感」の評価結果について述べる。

基礎体験活動の取り組み状況は、学年毎に3.2～3.4とほぼ同水準となった。例年2年生は、この値が1年生の時よりも減少するが、今年度も若干その傾向は見られた。基礎体験活動の主力である2年生は、取り組もうとする意識や目指そうとする姿が高く設定されているため、かえって自己評価が厳しくなることも考えられるが、今後はさらに原因等を分析し対応をする必要がある。5段階評価で4又は5とした学生が1，2年生は57～61%，3，4年生は50～53%おり、全体として熱心に取り組んでいるといえる。

また、各学年の有意義感の回答結果は、4.0～4.3であり、多数の学生が基礎体験学修に有意義感をもっていることがわかる。2年生と4年生の平均値が4.0と最も低いが、有意義感を感じている割合は、それぞれ85%，82%といずれも高い。活動を行いたいが、その時間の確保等が課題としてあげられる。

有意義感を感じる理由として整理すると次の3点があげられる。

1) 子どもとのかかわり

- ・成長する姿、発達段階を実感することができる。
- ・関わり方やコミュニケーションの取り方を実践できる。

2) 支援・指導の実際

- ・授業や学習支援の現実を把握でき、自分自身のスキルアップにつながる。
- ・日常の活動の在り方や教職等の仕事理解や体験ができる

3) 企画・運営力の伸長

- ・企画・運営を体験することで、責任感・手順を学んだり達成感を味わえたりする。
- ・様々な人との交流、協力ができ、組織の在り方について考えることができる。

全体として、社会人としての責務や貢献による達成感を感じることができていることが大きい。

逆に有意義感を感じない理由として、少数意見ではあるが、やらされている感を感じたり、教職を目指さない学生にとっては、役に立たないと感じたりしている。

3. 受け入れ先事業所アンケート

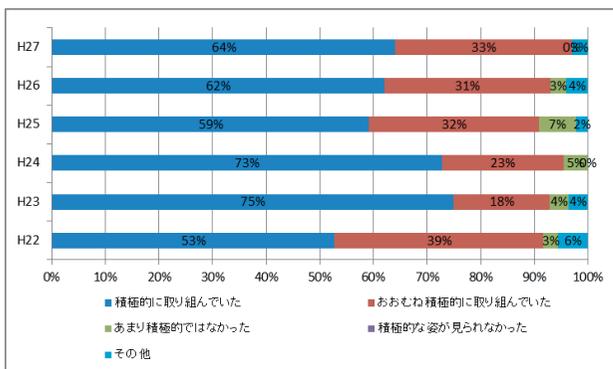


図5 受け入れ先事業所からの学生の取り組み状況のアンケート結果

教育支援センターでは、毎年受け入れ先事業所にアンケートを送り、基礎体験活動の学生の取り組みの様子を毎年度末に評価していただいている。その調査項目の1つである、「学生は体験活動へ積極的に取り組んでいましたか」の回答結果をグラフにしたものが図5である。

「積極的に取り組んでいた」と「おおむね積極的に取り組んでいた」を合わせると、例年90%を超えていることから、学生が体験活動に積極的に取り組んでいる様子がわかる。ただしこの数値に満足することなく、さらに「積極的に取り組んでいた」の割合が上がるよう、事前・事後指導や基礎体験セミナー等を通して、学生に指導していく必要がある。

次に、各事業所から送っていただいたコメントを紹介する。学生の意欲的な取り組みに対する好意的な内容が多かったが、その一方で「指示がなければ動かないではなく、もっと積極的に動いたほうがよい」や「メールを送信するときのマナー（自分の名前を必ず明記すること）」という意見もあった。

【事業所からのコメント】

- ・自分から動こうとする学生さんもいたことに感心しました。指示されたことをきちんとしようとする姿勢も見られました。
- ・戦力になってもらいました。ただ慣れない場ではあるので、戸惑いもあった様子です。
- ・夏の企画事業について、やる気は感じられたが、もう少し積極的・主体的に取り組む姿勢がほしかったと思うところがあった。
- ・体験活動（中学生の学習指導等）の経験を教職に生かそうとする前向きな姿勢が感じられました。
- ・その子に応じた指導方法を考え、熱心に取り組んでいただいています。
- ・長期間の活動支援を通じ、学生全員が活動のねらいや内容に添い、大変熱心に活動されており感激しました。
- ・初めて対応する児童やその指導などに戸惑われながらも、積極的に学習指導・児童からの相談対応をしていただきました。
- ・皆さん地域の方や子どもさんと積極的に真面目に関わりをもっておられました。
- ・学生が持っている技術を手探りでも一生懸命教えてくれています。こちらからお願いしたことだけをするのではなく、自分で気がついたことを進んで実行する姿に感心しました。

V 成果と今後の課題

今年度も本稿で報告した通り、地域・学校の協力のもとで、多くの学生が基礎体験活動に参加し、たくさんの学びを得ることができた。

また12年目となった今年度は、この学修での学びの質を高めることを目指し、現状の再分析と把握、問題点の抽出、改善に向けての取り組みを始めたところである。以下、主な課題と今後の方向性について挙げる。

・学生の取り組みに関わって

ここ数年の学生の基礎体験活動における取組状況から次のような課題が顕著になってきた。

- 特定の体験活動，場所でのみ体験時間を重ね，多様な活動に参加していない学生が見受けられる。
- 3年次の教育実習前に，学校での体験活動を全く行っていない学生が多く，児童・生徒への対応力が育成されていない。
- 体験活動を重ねる中で，教職志向が低下する学生がいる。
- 大学での学びよりも体験活動を優先させる学生がいる。

そこで島根・鳥取両県での教員需要の見通し，新学部構想とそれに伴う教育学部の縮小，教員就職率のアップなど教育学部の置かれた現状と将来像等を認識したうえで，今後は，上記に掲げた課題を解決していく方法として，次のような点について検討していく。

- 多様な活動を行うためのキャップ制（一つの体験活動の上限時間数）の設定
- 4年間の体験活動に対するモデルの提示
- 教員養成に重要と判断できる体験活動と大学生一般の社会経験，社会貢献といった活動との峻別

・募集活動に関わって

本学の1000時間体験学修のカリキュラムが地域の方々に認知されるようになり，協力していただける事業所が増加し，多様な体験の場が供給されるようになった。そのような中，体験活動そのものが目的化し，本来の教師力育成というねらいについての周知徹底が図られていない活動も混在するようになった。もちろん社会人としての素養を養う上であらゆる活動に価値があり大変貴重な活動であると考えますが，本来アルバイト代を支払って行うべきものやボランティア活動の要素が強い活動等については，今年度は基礎体験学修の趣旨を説明し，全学のボランティア活動の募集を紹介するようになってきた。その他，指導者不在で学生任せの活動，学生への負担が大きく授業に支障をきたす活動など様々な問題を生じている。そこで，協力いただいている全事業所に「基礎体験活動の改善」について文書にて通知し，次年度一年間をかけて，次に掲げる視点をもとに基礎体験活動を選考し，活動内容の質的向上を図っていく方針である。

- 教育学部の教職志向を高めるもの
- 教育学部生の教師力（10の教師力）を効果的に高めるもの
- 体験先での学生指導（トレーニングから評価まで）体制が確立されているもの
- 活動の安全，安心が保証されているもの

